

エッセイ 植松 浩 二 (熊本市副市長)

私はこれまで、かなり頑ななガラケー愛好者だった。あるいは、スマートフォン

嫌悪者だったのかもしれない。しかし、先日(六月二日)、ついにスマホを購入した。購入手続きはすべてネットです、あつけない変節?である。ただし、いつでも引き返せるように、ガラケーもそのまま使っているが。

ガラケー愛好の理由は、①メール、音声通話、iモード等の機能で十分事足りていたこと、②テンキーのメカニカルな感触が心地よかつたこと、③個人的な好みかもしれないが、デバイスの形状がスマホより格好いいと思ったこと、それに何となく④スマホの料金体系(昨今、大手三社に対して料金の値下げが課題として突きつけられているが)が、自分の利用形態に適合しなかった(要するに高かった)ことなどである。加え

て、時代の流れに対するさやかな抵抗があったのかも?

しかし、LINEを始めとするコミュニケーションアプリが広く普及し、取り残され感が生じてきたことに加え、いわゆる格安スマホの登場などにより、サービス水準と料金体系の選択

時代の流れに抗えず...

肢が増えたことにより、状況は変わった。

特にLINEなどの手軽なコミュニケーションアプリは、若者たちのプライベートな利用に限られると思っていたが、海外商取引をバリバリやっているビジネスマンが他国にいる社員との連絡にごく普通に利用しているのを見ると、もはや時

代は変わったと思わざるをえない。ビジネス利用は、宛先・件名・本文と並ぶ定番のメールソフト、という先入観は過去のものとなりつつある。LINEのあの

“吹き出し”に文字が沢山つまり、それがいくつも並んでいるのには違和感を覚えるものの。

個人的な話になるが、淡路に住む母が、お盆に里帰

りした兄に同行してもらい、ガラケーからスマホに買い替えたとのこと!わっ、下手したら、八十二歳の母に後れを取るところだった。

母は、買ったその日のうちにLINEを始め、スタンプはもちろん、画像のやり取りもしている。確かに、手軽で使い勝手がいい。時代の流れには、もはや抗い

カット・正村タカシ



ようもない。

実は、スマホを購入するにあたり、某大手IT企業のアドバイザーによる働き方改革に向けたお話がひとつのきっかけとなっていた。

その人曰く、「IT機器の活用により業務を効率化して時間を生み出し、生み出された時間で本当に会いたい人とリアルに会う時間をつくる。そして、直接会ってしかできない会話をすると。」

ITの普及がリアルな人間関係を損ねるような感覚を持っていたが、使い方によっては人間同士のリアル

な交流を深めることになる。スマホ、というより、それに搭載されているアプリケーションは、生活を便利にするとともに、時間を生み出すことができる。ただし、ゲーム等に没頭し、逆に時間を奪われてしまう「悲劇」には十分な警戒が必要ではあるが。「熊本文化」のエッセイとしては、スマホの活用、あるいはそれにより生み出された時間により、文化に接する、文化活動に勤しむ、文化人と交わるなど、その深化につながるものと思料するところ。

かくいう私、スマホを持って五ヶ月、変わったことは、うーん、今のところ飲み会の連絡・調整が圧倒的にスムーズになったことぐらいか。まだまだ修養が必要である。

※念のため、「ガラケー」とは、ガラパゴス携帯の略で、スマートフォン登場前の普通の携帯電話のことです。

私は雨が好きです。朝、雨音が目覚めるとその日一日穏やかな気持ちです。雨音に誘われて出かけたくてソワソワします。楽譜を片手にカフェに行くのが好きです。優しい雨音を聞きながら謹読みをします。カフェの窓から見える、雨に濡れてキラキラとした緑の葉っぱに生命を感じ、葉の先からこぼれ落ちる小さな雫に愛しさを感じます。ぽーっと眺めて雫を数えます。

傘をさして木の下に立つのが好きです。雫たちが織りなす傘の上の音楽会が好きです。不規則なリズムに心がワクワクします。雨のヴェールに包まれて色鮮やかに咲きはこる紫陽花が大好きです。小さな花びら全てがプリマの輝きを放っています。その中を悠然と動くカタツムリ君を眺めるのが好きです。何かに焦る心のスピードを緩やかにして

雨のある風景がくれるもの

くれます。雨の日はいつもと違う風景を見せてくれます。幼いころは水たまりが好きでした。めったに履けないお気に入りの赤い長靴を履いて、わざと水たまりに入り、パチャパチャと飛び跳ねのが喜びでした。カエルの合唱を聴くのが好きでした。高い声に低い声、大

が入りません。濡れるのが嫌でした。登校中にへアスタイルが崩れるのが嫌でした。理由は分からず落ち込んだ。理由は分からず落ち込んだりもしました。でも、校内放送でクラシック(ショパン)が流れると、物思いにふけて、ちょっとだけ大人になった気分で心潤していました。

私も現在声楽家という道に進み、歌を歌い空間芸術を彩るお仕事させて頂いています。

きなカエル? 小さなカエル? 想像するのも楽しみでした。♪あめあめ・ふれふれ・かあさんが♪母と歌いながら道を歩くのが幸せでした。

学生時代はというと、雨の日は朝からどんより、一日が憂鬱でした。どんなに頑張ってもやる気スイッチ

ております。最初に行なうことは、楽譜に書かれた音符・歌詞としっかり向き合い、それらから読み取り、感じたことを・楽譜に書かれていない部分をどうあぶり出し、自分の中にある世界観でどれだけ表現工夫するのかを考え、それからメロディーと歌詞を大事にし

ながら想いをリンクさせていきます。作品作り全てにおいて気をつけていることが、普段の日常生活の中で常にアンテナを張り、想像し感動し変化に気付き、楽しんで喜んで怒って泣いて、純粋に、そして自由に心が動く感受性豊かな自分でありたいと思っています。

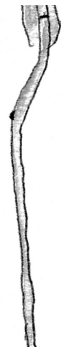
そこで最近の長雨続きの中でふと感じたことが、雨の日に影響を受けている自分自身の心の姿だったので。晴れている日は一歩外に出て、この青い空が当たり前、まぶしい太陽当たり前、ああ気持ちがいい、何か良い事あるかなあ: 過去も現在も変わらない自分がいて。しかし、雨の日の自分を振り返ってみると、幼いころから現在まで、いろんな当時の情景と共に感情までもが思い出されるのです。とても素直に心揺り動かされている私がいまいました。

情景描写、心理描写の明確な表現がとても大切な音楽の世界。特に言葉の持つエネルギーを的確に表現し伝えなければならぬ歌の世界では、繊細かつ大胆に物事を受け入れ考えることが大事です。

エッセイ

福嶋 由記

(洋楽ソプラノ歌手)



カット・正村タカシ

最後に、今年の豪雨による災害で被害に遭われました方々のご冥福をお祈り申し上げます。